

茨城県筑西市

炭 焼 戸 東 遺 跡

— つくば明野北部工業団地進入路埋蔵文化財発掘調査報告書 1 —

2007

茨 城 県 筑 西 市
筑 西 市 教 育 委 員 会
株 式 会 社 東 京 航 業 研 究 所

茨城県筑西市

炭 焼 戸 東 遺 跡

— つくば明野北部工業団地進入路埋蔵文化財発掘調査報告書 1 —

2007

茨 城 県 筑 西 市
筑 西 市 教 育 委 員 会
株 式 会 社 東 京 航 業 研 究 所

例 言

- 本書は、茨城県筑西市に所在する炭焼跡の発掘調査報告書である。
- 調査は、つくば明野北部工業団地進入路建設に伴い、筑西市より調査委託を受けた株式会社東京航業研究所が実施した。
- 調査については、筑西市教育委員会の指導のもとに行った。
所在地 筑西市松原字炭焼跡 629 番地ほか
調査面積 967 m²
調査期間 平成 19 年 5 月 28 日～平成 19 年 6 月 9 日
調査担当 大橋 生 (東京航業研究所)、林 邦雄 (東京航業研究所)
調査及び整理参加者 荒川康佑 大関きよ子 飯野正子 市瀬俊一 小野麻人 加倉井タキ子
加藤 玄 川下由光 川村宣央 杉山ミヨ 土屋隆行 中島伊一 中島 亨
古川貴弘 峯岸未以留 村山彩子 森田美代 渡辺真吾 渡辺弘美
- 本書の編集は大橋・林が担当し、執筆は大橋・林・小野・市瀬が分担した。各項の文責は各文末に記載している。
- 調査に関わる遺物・図面・写真等は、筑西市教育委員会が一括して保管している。
- 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表する次第である (敬称略・順不同)。
今井千恵 佐々木藤雄 村山 修
筑西市建設部土木課

凡 例

- 本文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として次の通りである。
全体図 1/500 遺構図 溝 1/60 住居跡・地下式坑 1/40 土坑・ピット 1/30
土器実測図 1/3 土器拓影図 1/3
- 遺構実測図中の座標値は国家標準直角座標Ⅸ系に基づく。方位は座標北を、レベルは海拔高を示す。
- 写真図版は原則として、1/2 とした。
- 遺物番号は本文、実測図、写真図版と一致する。
- 遺構・遺物の色調表記は『新版標準土色帳 (2001 年度版)』を基準とした。
- 遺物観察表における法量の () 内数値は現存最大値、[] 内数値は復元実測値を示す。
- 遺構内における遺物出土状態を示すにあたり、次の記号を使用した。

●土器

目 次

序文 例言 凡例 目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 試掘調査の概要	1
第3節 調査の経過	3
第4節 調査方法	3
第5節 基本土層	4
第2章 遺跡の概観と立地	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 縄文時代	11
第1節 遺物	11
第4章 古墳時代	12
第1節 遺構	12
第2節 遺物	14
第5章 奈良・平安時代	17
第1節 遺構	17
第2節 遺物	18
第6章 中世以降	19
第1節 遺構	19
第2節 遺物	24
第7章 総括	25
参考文献	
報告書抄録	
写真図版	

挿図・表目次

第1図 遺跡の位置	2	第14図 出土遺物③	18
第2図 遺跡全体図	3	第15図 1号地下式坑・1号溝	20
第3図 基本土層図	4	第16図 2号溝	21
第4図 遺跡全体図	5	第17図 1～7号土坑	22
第5図 炭焼戸東遺跡と周辺の遺跡	7	第18図 8号土坑	23
第6図 江戸期の海老ヶ島城、松原村絵図	10	第19図 1～8号ピット	23
第7図 明治前期の海老ヶ島城周辺図	10	第20図 出土遺物④	24
第8図 出土遺物①	11	第1表 周辺の遺跡一覧	7
第9図 1号住居跡	12	第2表 遺物観察表①	11
第10図 1号住居跡カマド及びピット	13	第3表 遺物観察表②	16
第11図 9・10号土坑	13	第4表 遺物観察表③	18
第12図 出土遺物②	15	第5表 遺物観察表④	25
第13図 3号溝	17		

写真図版目次

図版1 遺跡遠景・遺跡全景	
図版2 試掘1号住居・試掘3号溝・遺跡全景・遺跡南側・遺跡北側・遺跡全景・基本土層・1号住居	
図版3 1号地下式坑・1号溝・2号溝・3号溝・9号土坑・10号土坑	
図版4 1～8号ピット	
図版5 出土遺物①	
図版6 出土遺物②	

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成17年12月22日付け筑土木第117号にて、筑西市長 富山省三（建設部土木課長）から、筑西市松原地内におけるつくば明野北部工業団地進入路整備工事に伴い「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて（照会）」が提出された。筑西市教育委員会は、工事予定地に炭焼厂東遺跡が所在していることを確認し、照会に基づき工事予定地内の遺跡について平成18年3月15日から25日までの10日間にわたって試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺構と遺物を確認したことから、今後の遺跡の取り扱いについて筑西市建設部土木課と協議を行った。

協議の結果、工事の計画変更は困難であるため、文化財保護法第94条に基づき、平成19年3月20日付け筑土木第169号にて、筑西市長 富山省三から茨城県教育委員会教育長あて「埋蔵文化財発掘の通知について」が提出された。その後、平成19年4月13日付け文第44号にて、茨城県教育委員会教育長から筑西市長あて「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」により工事着手前に発掘調査を実施するよう勧告があり、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

筑西市教育委員会と筑西市建設部土木課は、発掘調査の実施に向けて具体的内容の調整を図り、調査を株式会社東京航業研究所に委託することとした。調査に際して、筑西市、筑西市教育委員会、株式会社東京航業研究所の三者により「埋蔵文化財に関する協定書」を締結するとともに、株式会社東京航業研究所より平成19年5月16日付けで、茨城県教育委員会教育長あて「埋蔵文化財の発掘調査の届出について」が提出された。調査経費については筑西市が全額負担し、筑西市教育委員会の指導のもと、株式会社東京航業研究所が同年5月28日から6月9日まで発掘調査を実施することとなった。

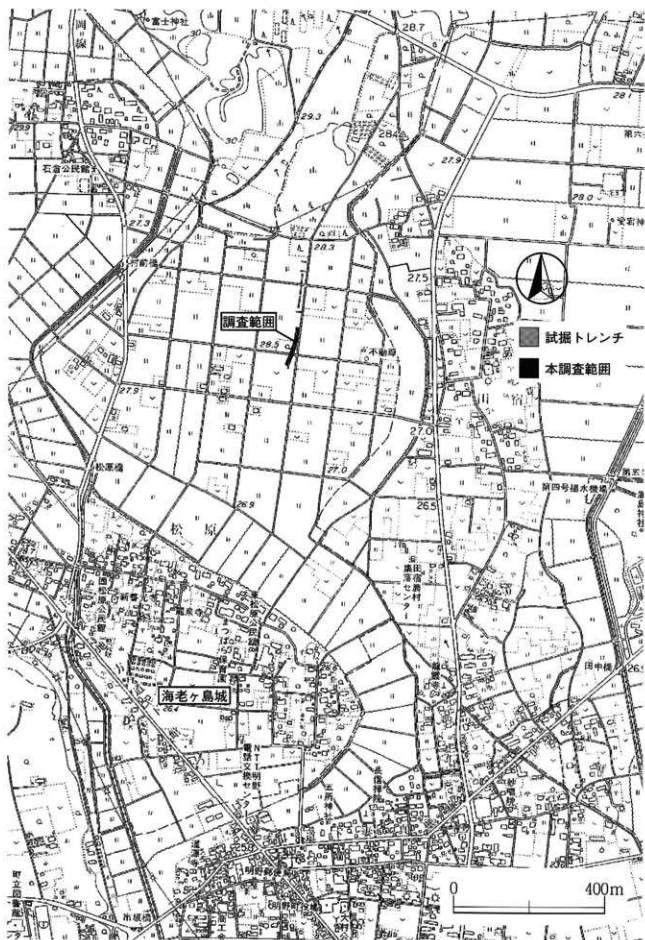
第2節 試掘調査の概要

試掘調査は松原地内のかつば明野北部工業団地への市道進入路建設に伴い、当該地点における埋蔵文化財の有無の確認を目的として、平成18年3月15日から、25日までの10日間にわたって実施した。

調査は、道路計画範囲を網羅するように3m幅のトレンチを9箇所設定し、実施した。調査面積は約645㎡であった。

調査の結果、竪穴住居跡1軒、溝9条、土坑17基、ピット98基を検出した。遺物は縄文土器8点、土師器67点、陶器2点、磁器5点、土師質土器1点、鉄製品1点を検出した。古墳時代後期から奈良・平安時代を主とした遺構、遺物が調査区南側を中心に検出された。7号トレンチでは、溝を検出しており、覆土より古墳時代後期の甕を検出した。8号トレンチでは、竪穴住居跡1軒を検出し、覆土より古墳時代後期の坏3点を検出した。9号トレンチでは、溝を検出した。これらの結果を受けて、本調査では7～9号トレンチの範囲を対象とした。また、7号トレンチの溝を3号溝として、8号トレンチの住居跡を1号住居跡として、9号トレンチの溝を1号溝として、遺物も合わせて、報告する。

（大橋）



第1図 遺跡の位置 (1:10000)

第3節 調査の経過

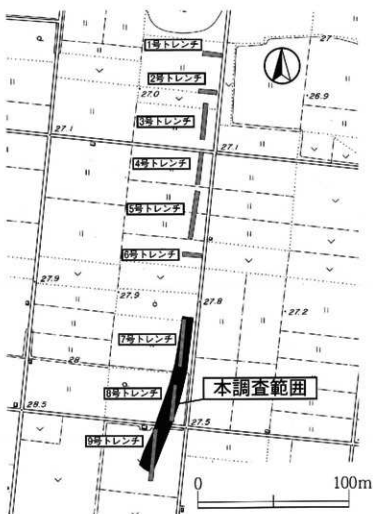
発掘調査は、平成19年5月28日～平成19年6月9日までの2週間にわたって実施した。先ず5月28日より表土掘削を開始し、地表より60cm程の深さで遺構を検出した。30日までに表土掘削を終了し、住居跡1軒、地下式坑1基、溝3条、土坑10基、ピット8基を確認した。これらの遺構の調査を適宜実施し、6月7日にはラジコンによる空中写真撮影及び写真測量を実施、8日には調査を終了した。出土遺物は、少なく、収納箱1箱程であった。

整理作業は、平成19年6月11日～平成19年9月30日まで実施した。6月には遺物の洗浄・注記・接合作業・写真整理作業と並んで、写真測量した遺構の図化作業をSTP（デジタル図化解析機）を用いて行った。

7月には遺構図面の修正・トレース、遺物の実測・トレース、遺物写真の撮影、図版作成、原稿執筆などの作業を行い、8月には報告書編集作業を実施した。（大橋）

第4節 調査の方法

調査区の座標は公共座標（世界測地系）を基準に設定した。調査対象地は、総面積は967㎡を測る。対象地全域が網羅されるよう10m方眼のグリッドを設定した。調査にあたって、包含層および遺構内出土遺物については、原則として光波測量機を用いて3次元記録を実施した。また、遺構については、デジタルカメラによる写真測量と手実測作業を併用した。写真撮影にあたっては35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（500万画素）を併用し、適宜、記録撮影を行った。



（大橋）

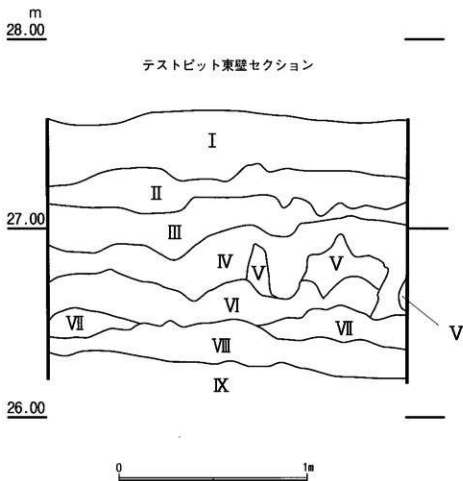
第2図 遺跡全体図 (1:2500)

第5節 基本土層

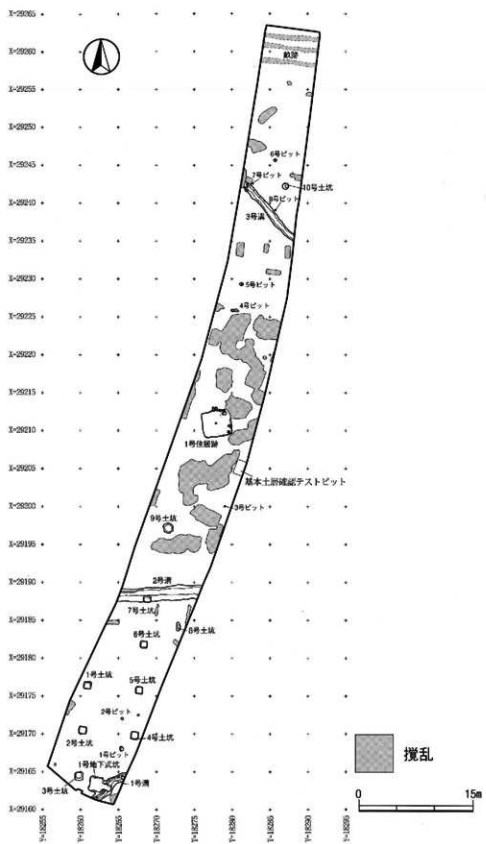
基本土層の確認は、調査区中央部の東壁に沿って、2m×2mのテストピットを設けて、土層観察作業を行った。基本土層の概要は以下の通りである。各遺構はⅢ層上面で確認されたが、いずれも覆土は浅く、後世に削平されたものと考えられる。旧石器時代の遺物は確認されなかった。

(大橋)

- I層 表土・耕作土層
- II層 10YR4/6 褐色土層 暗褐色土、ローム粒を微量含む。粘性をもち、やや締まりに欠ける。
- III層 10YR4/4 褐色土層 ローム粒を少量、黑色粒子を微量含む。粘性をもち、締まる。
- IV層 10YR4/6 褐色土層 砂粒、黑色粒子、赤色粒子を微量含む。粘性をもち、締まる。
- V層 10YR4/6 褐色土層 砂粒、黑色粒子、赤色粒子を微量含む。粘性をもち、締まる。(ハードローム)
- VI層 10YR4/6 褐色土層 礫を少量、砂粒、黑色粒子、赤色粒子を微量含む。粘性をもち、締まる。
- VII層 10YR5/6 黄褐色土層 砂粒を中量含む。粘性をもち、締まる。
- VIII層 10YR5/6 黄褐色土層 砂粒を多量含む。粘性をもち、締まる。
- IX層 砂礫層



第3図 基本土層図 (1:20)



第4図 遺跡全体図 (1:500)

第2章 遺跡の概観と立地

第1節 地理的環境

炭焼戸東遺跡は、茨城県の西部、筑西市の松原地区に所在する。筑西市は南東に筑波山を望み、北と西で原境と接し、北が栃木県芳賀郡二宮町、東には桜川市、南には下妻市、西には結城市及び栃木県下野市がそれぞれ隣接する。本遺跡は筑西市に所在しているが、筑西市は2005年3月に下館市、関城町、明野町、協和町とが合併して誕生した市で、合併前の地名は真壁郡明野町大字松原字炭焼戸である。

旧明野町は、東に筑波山麓に沿って霞ヶ浦に流れ込む桜川とその支流の観音川、西に利根川に流れ込む小貝川に挟まれた標高20～40mの低台地に立地し、支谷によって複雑に開析をうけている。西方は小貝川による堆積と考えられる台地が形成され、東方は桜川付近まで平坦な地形である。本遺跡を含む旧明野町の大部分はその平坦な地に所在する。現在、微高地は集落や畑地、その他は水田として利用されている。また、遺跡は東側の台地周縁から桜川に至る低台地に確認されている。

第2節 歴史的環境

本遺跡は、旧明野町市街地より北に約1km、桜川支流の大川左岸に位置し、周囲は畑地や水田が広がる標高27mを測る地点である。縄文時代より生活の痕跡が見出され、特に古墳時代後期より確認されている遺跡が爆発的に増加する。また、中世から海老ヶ島城が築城され、中世以降は海老ヶ島城を中心に発展を遂げる。現在の西及び東松原地区や海老ヶ島地区は海老ヶ島城の城下町として発展したと考えられる。以下で各時代の主な遺跡を概観する。なお、各遺跡番号は茨城県遺跡地図(茨城県教育委員会 平成13年)に拠っている。

旧石器時代の遺跡として、中根十三塚遺跡、中妻(倉持)遺跡が挙げられる。茨城県教育財団の調査で中根十三塚遺跡からは、ナイフ形石器や剥片、中妻(倉持)遺跡からは、ナイフ形石器や尖頭器などが確認されている。

縄文時代の遺跡は、比較的広範囲に及び、中妻(倉持)遺跡、山王堂遺跡、宮山遺跡(15)、鍋山東原遺跡(33)、台山遺跡(63)、岡山遺跡(69)、館野遺跡(74)などが確認されている。館野遺跡では、中期後葉の加曽利EⅢ式の縄文土器や石鏃、円石などが出土している。中妻(倉持)遺跡では、中期から後期にわたる住居跡や土坑、埋甕等が検出され、なかでも骨片を伴う土坑や埋甕が確認されているのは特筆される。縄文時代中期から後期を中心にある程度の規模を持つ集落が形成されていたことがわかる。

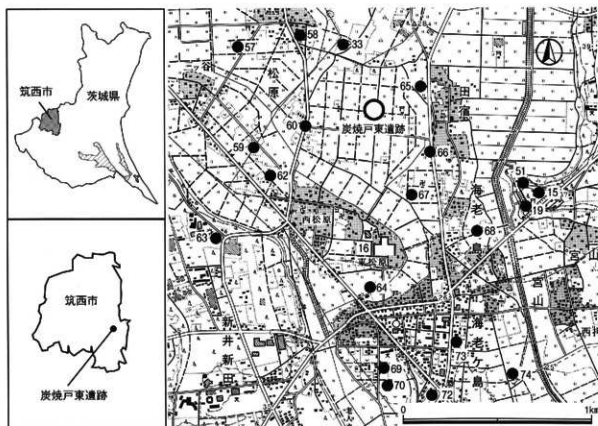
弥生時代の遺跡は、宮山遺跡(15)、岡山遺跡(69)、館野遺跡(74)などが挙げられる。館野遺跡では、住居跡5軒と二軒屋式の弥生土器、紡錘車3点が出土している。この時期の旧明野町域では後期が主流で、小規模な集落が営まれていたと考えられる。

古墳時代では当遺跡を含め、多くの遺跡が知られている。主な集落遺跡としては、宮山遺跡(15)、鍋山東原遺跡(33)、石倉東遺跡(58)、中根遺跡(59)、炭焼戸東遺跡(61)、新堀遺跡(62)、台山遺跡(63)、城ノ内遺跡(64)、菰冠北遺跡(66)、菰冠南遺跡(67)、戸張遺跡(68)、岡山遺跡(69)、海老ヶ島東原遺跡(73)、館野遺跡(74)などと数多いが、調査された遺跡は少ない。館野遺跡では後期の住居跡が2軒検出されている。古墳では、全長約100mを測る前方後円墳の宮山観音古墳(19)、稲荷塚古墳(70)が確認され、鍋山東原遺跡(33)では円墳8基が確認されている。古墳は中期頃に造営されることより、この時期にはこの地域を支配する首長層が存在していたことがわかる。

奈良・平安時代も古墳時代から継続して集落が営まれていることを遺跡の分布から知ることができる。主な遺跡を挙げると、宮山遺跡(15)、鍋山東原遺跡(33)、石倉西遺跡(57)、石倉東遺跡(58)、中根遺跡(59)、

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代				
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安			中世以降	旧石器	縄文	弥生	古墳
15	宮山遺跡		○	○	○	○	63	台山遺跡		○		○	
16	海老ヶ島城跡						64	城ノ内遺跡				○	○
19	宮山観音古墳				○		65	田宿炭焼戸遺跡					○
33	鍋山東原遺跡	○			○	○	66	壺冠北遺跡				○	○
34	八坂神社古墳				○		67	壺冠南遺跡				○	○
51	宮山石倉遺跡						68	戸張遺跡				○	○
57	石倉西遺跡				○	○	69	岡山遺跡	○	○		○	○
58	石倉東遺跡				○	○	70	稲荷塚古墳				○	
59	中根遺跡				○	○	72	久保新田遺跡					○
60	炭焼戸西遺跡						73	海老ヶ島東原遺跡				○	○
62	新堀遺跡				○		74	館野遺跡	○	○	○	○	○



第5図 炭焼戸東遺跡と周辺の遺跡 (国土地理院発行1:25,000『真槎』「筑波」に加筆)

炭焼戸東遺跡 (61)、台山遺跡 (63)、城ノ内遺跡 (64)、菰冠北遺跡 (66)、菰冠南遺跡 (67)、戸張遺跡 (68)、岡山遺跡 (69)、海老ヶ島東原遺跡 (73)、館野遺跡 (74) が確認されている。なかでも、館野遺跡で9世紀代に使用されていたと思われる第2号井戸から木製品の糸巻きと齋申が出土している。当時期の祭祀行為の一端が垣間見える遺物である。また本遺跡で2006年度に行われた調査によって、9世紀中葉から10世紀代の須恵器に「院」の墨書土器が多数出土していることも見逃せない。この時期は、延暦年間に白檮郡から真壁郡に改称されたことなどから、律令制下における中央集権化が進んだ時期であるが、平高望の東国への下向に伴う、平氏族の土着化と勢力の拡大が行われた時期でもあり、真壁郡近辺でも数回の合戦が行われたと『将門記』に記されている。なお、旧明野町周辺では将門伝承が数多く残されており、旧明野地区東石田には将門の伯父にあたる平国香の居館が存在したと伝えられている。

中世以降の遺跡としては、岡山遺跡 (15)、海老ヶ島城跡 (16)、鍋山東原遺跡 (33)、炭焼戸西遺跡 (60)、炭焼戸東遺跡 (61)、田宿炭焼戸遺跡 (65)、菰冠北遺跡 (66)、菰冠南遺跡 (67)、戸張遺跡 (68)、岡山遺跡 (69)、久保新田遺跡 (72)、海老ヶ島東原遺跡 (73) 館野遺跡 (74) などが確認されているが、基本的には海老ヶ島城に係わる遺跡が多い。そのため以下では、もう少し海老ヶ島城について概観したい。

(市瀬・林)

海老ヶ島城の立地と構造

海老ヶ島城は、南を平沼、西を西沼、北から東は深田に囲まれた比高1mほどの微高地を利用して築かれた平城である。現在、沼地は完全に埋め立てられ、主郭以下の土塁や空堀も大部分が耕作や宅地化により涸滅して遺構はかなり断片化しているが、往時はまさに沼地に浮かぶ島であり、要害の地であったと思われる。島はU字を横にしたような形状で、城域は、東西・南北ともに800mに及ぶ広大なものである。

遺構の残存状況は思わしくないものの、寛文12年(1672)と、安永年間(1772～80)ごろの海老ヶ島城の絵図(明野町1986)により、旧状をかなり再現できるので、以下これによって見ていきたい。城は、この島余体を城域とし、南に寄った位置に主郭以下3つの郭を輪郭式に、その東西北に大きな外郭を連郭式に配した縄張りである。外郭は、さらに水路や土塁などで細かく分かれていたようである。このような立地から、出入りや物資の搬入など水運に大きく依存したと伝えられ、外郭の北東端には船着場の跡と倉屋敷の地名も残る。

また、南の平沼を挟んだ対岸は新宿、東の深田を挟んだ対岸を田宿といい、ここはそのまま現在の旧明野町中心街となっている。城は、南方の新宿に向けて橋を架けており、ここが大手であったのだろう。上記と同じ安永年間(1772～80)ごろと思われる別の絵図(明野町1986)には、新宿と田宿を大きく囲む土塁(現在は消滅)も描かれており、その北東端には戸張の字名も残る(明野町1981)。これらを城下の町場や集落を包摂する惣構と考えれば、城域は東西南北に1.1キロ余りとなり、その面積は結城城や小田城、下妻城など、周辺大名の居城に匹敵するものとなる。

この地は、結城氏、小田氏や真壁氏、下館水谷氏、下妻多賀谷氏が接する境日であり、多数の軍勢の駐屯を想定しての築城であったであろう。また、現在も多くの県道がこの地で交差しているように、当時もこれら諸勢力の拠点をつなぐ街道がこの地で交わり、軍事的のみならず流通経済の拠点であったことは疑いなく、これらの理由から、巨大な城郭となったものと思われる。平成18年5月から6月にかけて、海老ヶ島城の北部から東部の外堀の発掘調査が行われ、15世紀末から16世紀のかわらけや内耳土鍋、幅2～4.4寸、深さ1寸弱の比較的小規模な堀が検出された。堆積土から水溜と推定され、一部には飲堀と思われる遺構も確認された(斉藤2006)。

海老ヶ島城の歴史

寛正2年(1461)から築城が開始され、応仁元年(1467)に完成したといい、結城成朝の嫡男秀千代

(海老原石近將監輝明或いは輝朝と称す)が10才で居城したとされる。この地は、結城本領からやや離れ、宿老とはいえ自立性の強い下館水谷氏、下妻多賀谷氏の外側に位置し、東の桜川を挟んで小田氏や貞壘氏と接する境目であり、結城氏の東方最前線基地として、多数の軍勢の駐屯を想定しての築城であったであろう。海老原氏は3代に渡りこの地で小田氏との抗争に明け暮れるが、天文15年(1546)に小田方の穴戸通綱に攻められ落城し、同氏は滅亡する。代わって海老ヶ島城には小田氏の重臣平塚山城守長信が入り、海老ヶ島七騎と称される土豪が付けられ、対結城氏の最前線基地となる。

弘治2年(1556)4月、結城政勝は小田原の北条氏康と組み、海老ヶ島城の南方山王堂において小田氏治を破り、海老ヶ島城や小田城など、小田領の大半を占領した。しかし、小田原勢が帰国すると、小田氏の盛り返しに遭い、8月には小田城が奪還される。同4年中には、海老ヶ島城も小田方に戻り、再び平塚長信が城将となった。

永祿2年(1559)、結城政勝から晴朝への代替わりに乗じ、小田氏治は結城領に侵攻するが、予想以上の反撃を受けて敗退。結城氏宿老の下館水谷政村の追撃を受け海老ヶ島城も落城し、平塚長信は城外で討死してしまう。

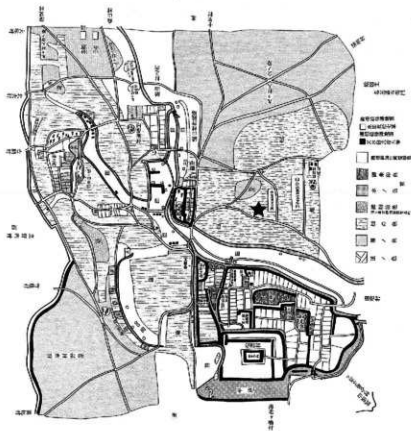
翌3年、北条と結ぶ結城晴朝に反発する下妻の多賀谷重経は、小田、佐竹らの連合軍で結城城を攻撃。晴朝は、海老ヶ島城などの支城を捨て、全ての兵力を結城城に集めて籠城する。結果、和議に持ち込まれるが、海老ヶ島城はまた小田氏の手に歸し、平塚刑部大輔が城将となる。

小田氏治は、失地回復を策して北条氏と手を結んだため、上杉謙信と結ぶ佐竹氏ら反北条勢力との紛争が激化する。同7年正月、上杉勢8千余と、小田勢3千が第二次山王堂合戦で激突し、氏治は大敗。小田城を捨て逃走する。この時の海老ヶ島城の動向は明らかではない。

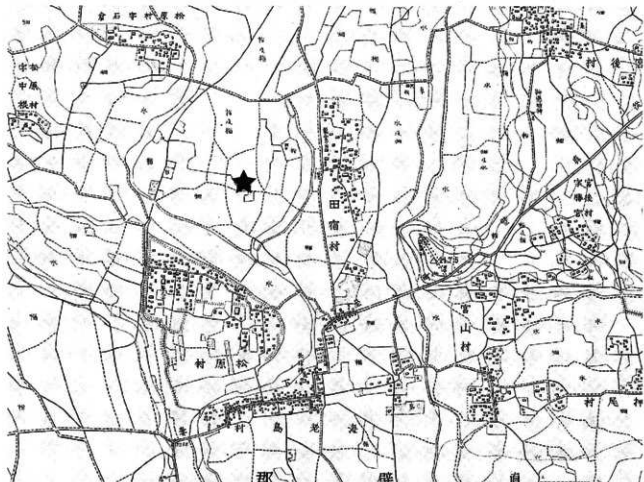
佐竹義重は、北条氏との抗争上、同盟国の多賀谷氏を救援するためにも、下妻へ南下するルートの確保が急務となり、同12年正月、海老ヶ島城の攻撃を開始。本郭まで攻め込んだ時点で、平塚刑部大輔は妻子や一族・家臣を証人に差出し降伏した。義重は、この城を穴戸義長に与え、義長は弟の外記(海老ヶ島新左衛門と称す)をここに配した。天正元年(1573)4月、外記は小田氏治の居城鹿沢城(土浦市)攻めで戦死したという。

文祿元年(1592)(同4年とも)7月、佐竹領内の配置替えの一環として、穴戸義長は本貫地の穴戸城(友部町)6万石から、海老ヶ島城6700石に移された。この時、穴戸から龍泉院など所縁の寺社をも移したが、これは今も当地に所在している。

慶長5年(1600)、関ヶ原合戦において傍観の態度をとった佐竹氏は、同7年に常陸国を没収され、出羽秋田に流転封となる。穴戸義長は、秋田には赴かずして佐竹氏を離れ、子孫は帰農したという。家臣閉も、在城僅か数年の縁の薄い海老ヶ島を離れ、穴戸に戻り帰農した者が多かった。海老ヶ島城はこの後廃城となったものと思われる。(小野)



第6図 江戸期の海老ヶ島城、松原村絵図（『明野町の村絵図』1986より転載）

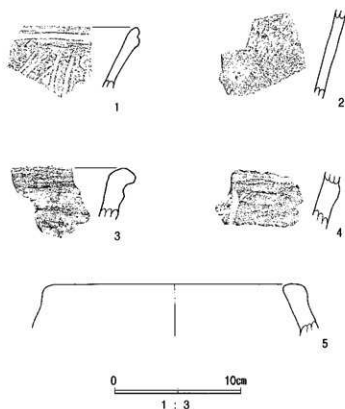


第7図 明治前期の海老ヶ島城周辺図（迅速図1：20000）

第3章 縄文時代

第1節 遺物

表土層と攪乱より縄文土器 17 点が出土した。1・2 は地文に縄文を用い、半截竹管文で沈線を施した縄文時代後期壺ノ内Ⅰ式の深鉢である。3・4・5 はキャリバー形と思われる器形を持ち、口縁部に無文帯を持つ、縄文時代中期加曾利 E Ⅲ～Ⅳ式であろう。(林)



第8図 出土遺物①

表2表 遺物観察表①

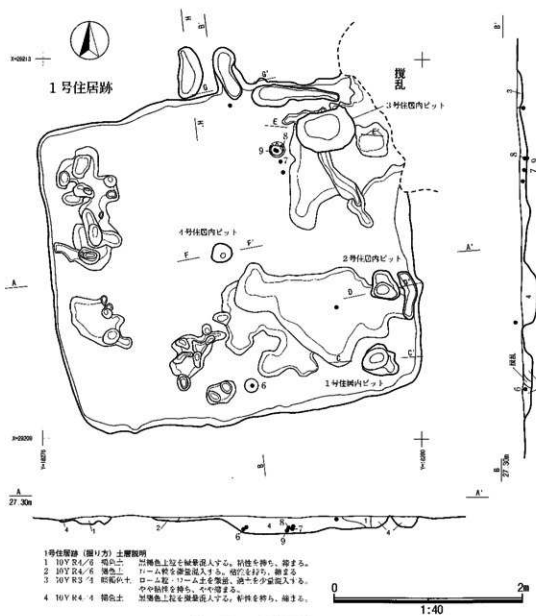
図版番号	出土地点	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調整・技法	胎土	色調	焼成	備考
1	表土層	縄文土器	深鉢	口縁部片	-	-	-	口縁部直下に沈線一条。地文縄文、半截竹管状工具で口文や沈線を垂下、断面V字状になる沈線を斜走。	黒・赤色粒子少量、石英・金剛砂母微量	明褐色	良好	壺之内Ⅰ式
2	表土層	縄文土器	深鉢	胴部片	-	-	-	半截竹管状工具を用いた斜走文。地文縄文。	黒・赤色粒子少量、石英・金剛砂母微量	明褐色	良好	1と同・個体か
3	7丁表上一括	縄文土器	深鉢	口縁部片	-	-	-	口縁部外側に折れ、直下に曲線のな隆帯。キャリバー型。	石英・チャート・砂礫多量、金剛砂少量	黄褐色	良好	加曾利 E Ⅲ～Ⅳ式
4	7丁表上一括	縄文土器	深鉢	胴部片	-	-	-	隆帯を垂下。	石英・チャート・砂礫少量、金剛砂少量	黄褐色	良好	加曾利 E Ⅲ～Ⅳ式
5	8丁表土層	縄文土器	深鉢	口縁部片	(18.4)	-	-	口縁部肥厚し無文。直下「く」字状に折れる。	白色粒子、石英・チャート少量、金剛砂微量	明褐色	良好	

第4章 古墳時代

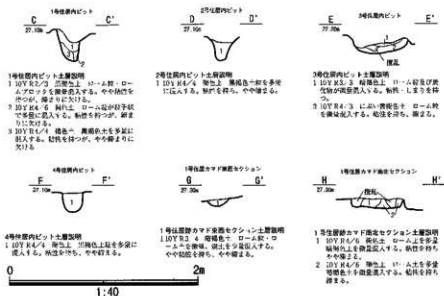
第1節 遺構

1号住居跡

調査区は中央部に位置する。主軸方位はN-15°-Wで、平面形はほぼ正方形を呈する。規模は長軸約3.8m、短軸約3.4mを測る。床面は擾乱された状態で検出され、硬化面等は確認できず、掘り方だけの調査となった。掘り方は起伏が激しい。周溝が一部残存し、北壁東寄りと東壁南寄りの壁面沿いに検出された。北壁沿いでは幅約24cm、深さ約5cm、東壁沿いでは幅約14cm、深さ約4cmを測る。ピットは4基検出された。3号住居内ピットは貯蔵穴の可能性も考えられる。その他の住居内ピットは柱穴と見られる。カマドは北壁中央に位置する。燃焼部と思われる掘り込みが検出され、覆土にはわずかに焼土が混入していた。遺物は、住居床面に近い位置より土師器坏6点、土師器甕1点が出土している。出土遺物から判断して7世紀初頭～前半の所産であった可能性が高い。



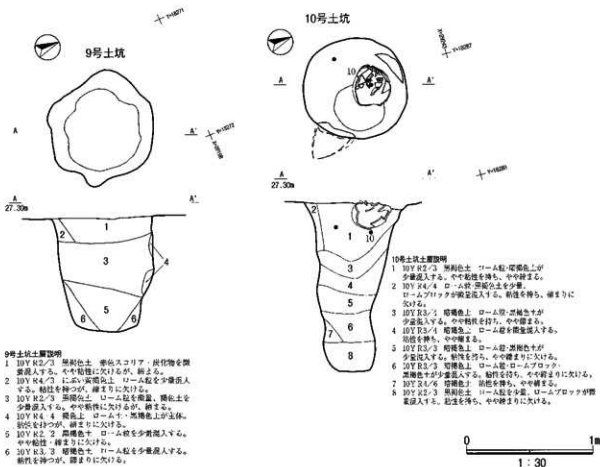
第9図 1号住居跡



第10図 1号住居跡カマド及びピット

9号土坑

調査区中央やや北寄りに位置する。平面形は円形を呈する。規模は径約82cm、深さ約90cmを測る。断面は円筒状を呈する。遺物の出土は見られなかった。覆土のあり方が10号土坑と類似しており、10号土坑とほぼ近い時期の所産である可能性が高い。確認面よりの深さはあまり深くないが、上部を削平されているようであり、非戸の可能性が考えられる。



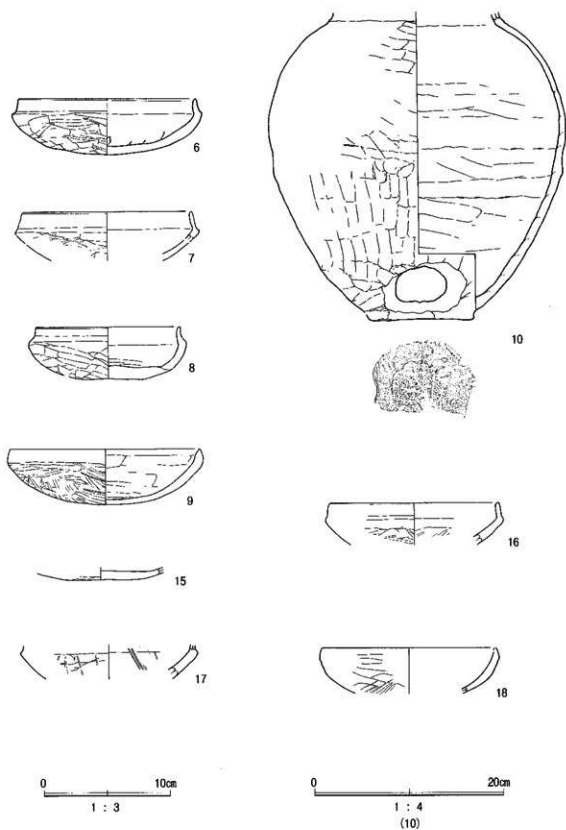
第11図 9・10号土坑

10号土坑

調査区北部に位置する。平面形は円形を呈する。規模は径約92cm、深さ約130cmを測る。断面は円筒状を呈する。テラスをもち、底面に近い壁面に斜め方向へ、径30cmほどの横穴が掘り窪められている。遺物は土師器甕1点が覆土上層より出土している。この甕は、胴部下半に焼成後、故意に円形の穴が穿たれていた。出土遺物や覆土のあり方から判断して6世紀中葉～後葉の所産である可能性が高い。確認面よりの深さはあまり深くないが、上部を削平されているようであり、井戸の可能性が考えられる。(市瀬)

第2節 遺物

出土遺物のうち古墳時代とわかるものは、土師器杯9点、土師器甕2点である。遺構内から出土したものは、3号溝より13の土師器杯、1号住居跡より6・7・8・9の土師器杯、10号土坑より10の土師器甕で、15・16・17・18は表土や遺構確認面一括で取り上げた遺物である。1号住居跡から出土した遺物は、6・7・8・9でいずれも土師器杯である。うち6・7・8は鬼高系須恵器模倣杯で、6・7がほぼ同形と推定でき、扁平な形態である。8は6・7より小ぶりで口縁部がやや内傾している粗雑な作りである。9は体部に稜を持たないもので、扁平な碗型を呈している。また、外面には漆と思われる物質が付着している。これらは形状より7世紀初頭から前半のものであろう。これらの遺物は住居跡の床面近くからの出土で住居跡の年代もその頃と想定できる。3号溝より出土した13は形状が9とほぼ同形で年代もほぼ同じ時期と考えられる。この溝の覆土からは13と後述する11が出土しているが、南に約30mの位置に13と同時期の杯が出土した1号住居跡が存在することから、周辺にも未検出の住居跡が存在することが想定されること、2006年度に調査された炭焼戸東遺跡(折原・松岡 2006)で断面形や深さが類似した溝が検出されており、その溝の想定される埋没年代が11の年代と近いこと等により、13は流れ込みと考えた。10号土坑から出土した10は最大径の位置や胴部の調整方法、底部の突出から6世紀中葉～後葉と思われる。また焼成後、胴部下半に内側から外側に径7cm程の人為的な穿孔がなされている。10は、常総甕より先行する土師器甕の型式学的分類を行った中村哲也氏の研究(中村 2003)における「向原類型」とされるものと、胎土や器面の調整方法が一致するもので、10もその流れを汲むものであろう。さらに、中村氏の研究において類例として挙げられている、土浦市石橋南遺跡における7号住居からは胴部下端に10と同様の穿孔をもつ土師器甕が出土していることも興味深い。15・16・17・18は遺構確認面や表土一括の遺物で、15は土師器杯の底部片で底部は静止ヘラ切りの未調整で内外面が黒色化している。これは調整方法や立ち上がりの角度から7世紀前半のものであると考えられる。16・17は6と同一の形態を持つ。17には縦方向のヘラミガキが施され、外面が黒色化している。これらも6と同じく7世紀前半のものであろう。18は9と同一形態で、同時期の7世紀前半のものであろう。以上古墳時代の遺物から、調査地区付近は古墳時代後期には居住的な空間として利用されていたことがわかる。なかでも10は穿孔された甕の出土事例が少ない上に、井戸状の土坑からの出土状況も、調査区近隣に類例が無く注目される。10号土坑や10の性格は、今後の調査例の蓄積を待つしかないであろう。(林)



第12図 出土遺物②

第3表 遺物観察表②

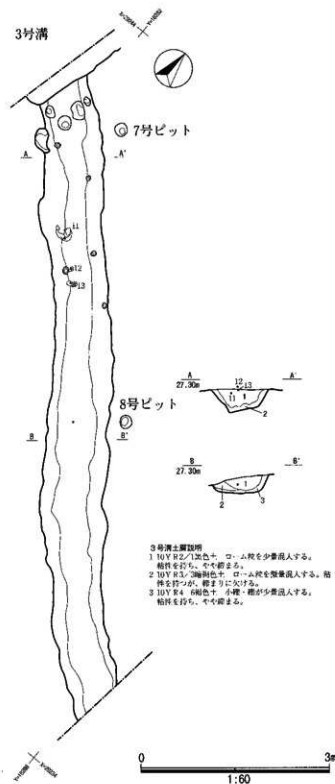
図版番号	出土地点	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調律・技法	胎土	色調	焼成	備考
6	1号住居	土師器	坏	略壳形	14.0	-	4.8	口縁部直下に線をもち、短く直上しヨコナデ。体部から底部、ヘラケズリ。	白色粒子微量、白雲母少量	褐色	良好	丸底、7世紀初頭、坏身模倣、扁平な器形。
7	1号住居	土師器	坏	口縁部から体部	(14.2)	-	(3.6)	口縁部直下に線をもち、短く直上しヨコナデ。体部から底部、ヘラケズリ。	金雲母少量	赤褐色	良好	丸底、7世紀初頭、坏身模倣。
8	1号住居	土師器	坏	口縁部から底部	11.6	6.8	3.9	口縁部短く内傾しヨコナデ。体部から底部ヘラケズリ。	白・赤色粒子・白雲母微量	褐色	良好	平底、7世紀前半、坏身模倣。
9	1号住居	土師器	坏	略壳形	14.8	-	4.3	口縁部短く内傾しヨコナデ。線なし。体部から底部ヘラケズリ。	白色粒子・金雲母・白雲母微量	棕色	良好	丸底、7世紀前半、茶褐色・黄色物質付着。
10	10号土坑	土師器	甕	胴部から底部		(9.6)	(33.8)	器内径胴部中央、口は張らない器形、口縁部ヨコナデ。胴部低位内・縦方向ヘラケズリ。底脚本葉状筋。	白色粒子多量、(白)雲母	黄褐色	良好	6世紀前半から中葉、胴部低位に内部からの径7cm程の穿孔。
15	7丁塚山石	土師器	坏	底部片	-	(5.6)	-	体部ヘラケズリ。底脚跡止ヘラ切り、未調整。	白色粒子微量	明褐色	良好	内外面黒色化
16	7丁表上一括	土師器	坏	口縁部から体部片	(17.0)	-	-	口縁部直下に深い線をもち、短く直上しヨコナデ。体部ヘラケズリ。	白色粒子少量	黄褐色	良好	7世紀初頭、6と同器形、坏身模倣。
17	7丁表上一括	土師器	坏	体部片	-	-	-	線をもち、体部ヘラミガキ。内面に縦方向ヘラミガキ。	白色粒子微量	黄褐色	良好	7世紀初頭、6と同器形、坏身模倣、内外面黒色化。
18	表上一括	土師器	坏	口縁部から体部片	(14.8)	-	(3.2)	口縁部線を持たず、内傾しながら立ち上がる。ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	白色粒子微量	にぶい黄褐色	良好	

第5章 奈良・平安時代

第1節 遺構

3号溝

調査区北半部で検出され、南東方向から北西方向へ直進している。主軸方向はS-22°-Eである。確認部分の全長は約9.8m、上部幅約95cm、深さ約33cmを測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。南東から北西へ向かってやや傾斜し、底面の標高は26.74～26.91mを測る。溝の北側で沿うように2基のピット、7・8号ピットが検出されている。確認された位置から判断して溝の付属施設の可能性がある。西側の一部の底面にピットが集中しており、橋梁施設の可能性がある。また、壁面に数ヶ所杭穴と思われるピットも確認された。遺物は土師器杯1点、土師器甕2点、土師器器種不明1点が出土している。出土遺物や覆土のあり方から判断して8世紀代の所産である可能性が高い。(市瀬)

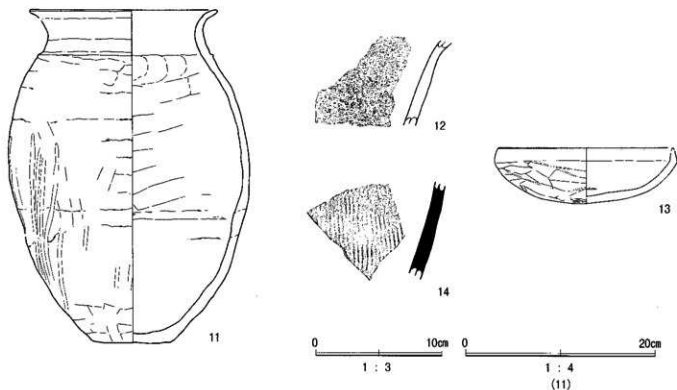


第13図 3号溝

第2節 遺物

遺物は須恵器甕1点、土師器坏23点、土師器甕20点、土師器部位不明34点が出土している。多くが細片のため図示できなかった。

今回出土した奈良・平安時代とわかる遺物は少なく、須恵器甕1点、土師器甕が1点出土している。すべて遺構からの出土で、2号溝より14の須恵器、3号溝から11・12の土師器甕である。2号溝は覆土の状況から中世以降に埋没した溝と考えられるため、出土した須恵器14は流れ込みであろう。14の甕は石英粒を含む特徴的な胎土を持ち、新治窯産と考えられる。胴部の横方向の平行叩きから8世紀中葉から9世紀中葉のものであろう。土師器甕の11は、口縁部の形状や最大径の位置、前述した理由から8世紀後半のもと考えられる。これら以外の出土した遺物は、表土からの出土で細片のため、時代が判明しなかった。13は古墳時代の項で先述したように、流れ込みと考えた。(林)



第14図 出土遺物③

第4表 遺物観察表③

図版番号	出土地点	種別	器種	部位	口径 (cm)	胴高 (cm)	底径 (cm)	調整・技法	胎土	色調	焼成	備考
11	3号溝	土師器	甕	口縁部から胴部	(21.6)	7.4	35.0	最大径部は胴部中央、やや肩の寄る部分。胴部全体にナデ。胴部上部器い斜方向へラケズリ。中央縦方向器いへラケズリ。下輪斜方向へラケズリ。底部突出。	白色粒子少量、石英多量、砂礫・長石微量	にぶい黄褐色	不良	8世紀後半
12	3号溝	土師器	甕	胴部	-	-	-	内外面ナデ	白色粒少量、石英少量、長石微量	褐色	良好	
13	3号溝	土師器	坏	口縁部から体部	(12.8)	-	4.1	口縁部近く内傾しヨコナデ。稜なし。体部から底部へラケズリ。	白・黒色粒子少量、石英・白雲母微量	浅褐色	不良	丸底、7世紀前半、9と同一器形。
14	2号溝	須恵器	甕	胴部片	-	-	-	縦方向平行叩き。	砂礫少量、石英少量	外面オリーブ灰色 内面陶青灰白	良好	表面自然釉多量、8世紀中葉～9世紀中葉、新治窯産

第6章 中世以降

第1節 遺構

1号地下式坑

調査区南隅に位置する。1号溝に切られている。各壁はほぼ東西南北に面しており、平面形は長方形を呈する。主軸方向はS-74°-Eである。上部はほとんど削平されており、確認部分の長軸は約2.0m、短軸は1.8m、深さは約60cmを測る。底面にはほとんど起伏がなく、底面標高は26.52～26.63mを測る。入り口と見られる部分が東壁から約1.1m突出して掘り込まれている。調査区の南側、茨城県教育財団の調査区では、火葬施設も検出されており、それらに関連した地下式坑と思われる。遺物の出土は見られなかった。覆土のあり方や1号溝との切り合いから判断して、中世以降ではあるが1・2号溝以前の所産である可能性が高い。

1号溝

調査区南隅で検出され、南西方向から北東方向へ向かってS字状に蛇行している。途中、1号地下式坑を切って築かれている。確認部分の全長は約5.0m、上部幅約1.0m、深さ約40cmを測る。断面はU字状を呈し、底面はやや起伏を持つ。壁に径10cm程の杭穴が検出された。南西から北東へ向かってわずかに傾斜し、底面の標高は26.56～26.72mを測る。遺物の出土は見られなかったが、覆土が2号溝と類似しており、2号溝とは近い時期の所産である可能性が高い。

2号溝

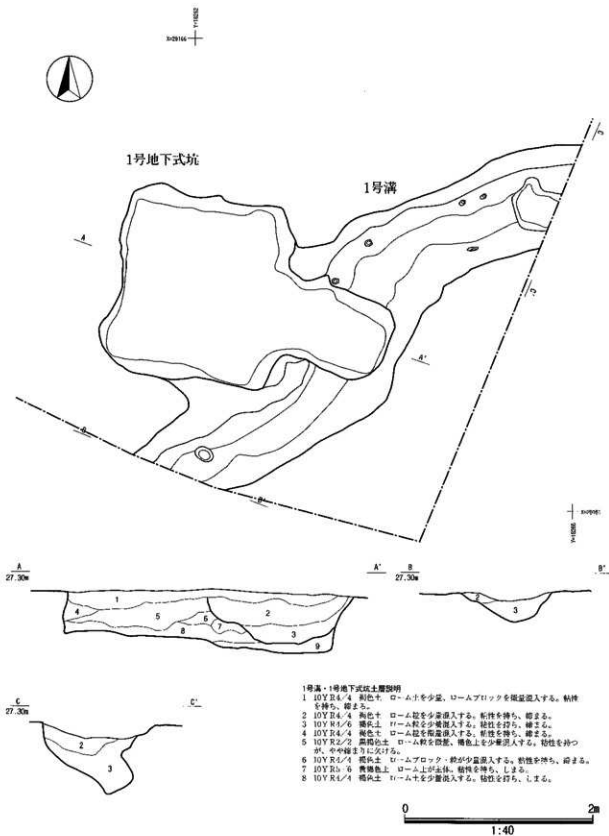
調査区南半部で検出され、西から東へ直進している。途中、7号土坑に切られている。主軸方向はN-88°-Eである。確認部分の全長は約10.7m、上部幅約1.8m、深さ約54cmを測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平世である。西から東へ向かってわずかに傾斜し、底面の標高は26.51～26.60mを測る。遺物は土師器壺1点、須恵器壺1点、須恵器鉢1点が出土しているが、これらは出土状況から流れ込みと思われる。覆土のあり方から判断して中世以降の所産である可能性が高い。

1号～7号土坑

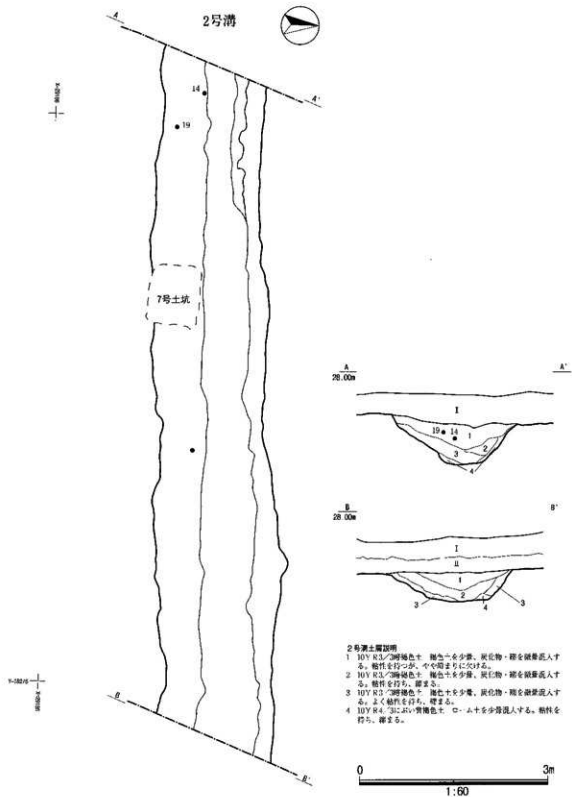
調査区南半部で検出された。東西約6.1m、南北6.9mの間隔で整然と並んで確認された。平面形はいずれもほぼ正方形を呈し、確認部分の一辺は約90～100cm、深さ約17～42cmを測る。遺物の出土は見られなかった。覆土はいずれもロームブロックを含む締まりのない暗褐色土が主体であった。茨城県教育財団が隣接個所で調査を行い、同様な土坑群が検出されている。覆土のあり方から判断して近現代の耕作に関する施設(字穴)である可能性が高い。

8号土坑

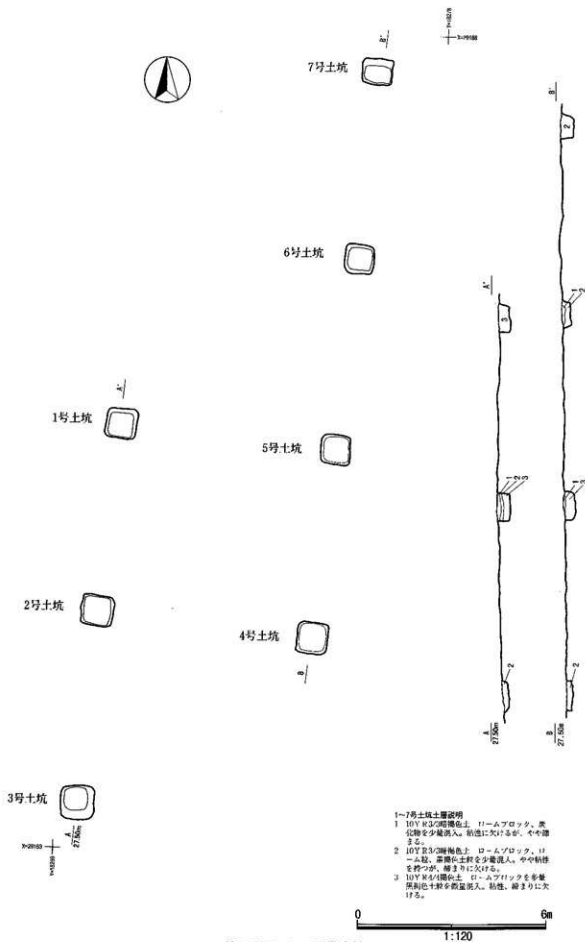
調査区南東部に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、主軸方位はN-5°-Eである。規模は長軸約1.1m、短軸約51cm、深さ約50cmを測る。断面は筒状を呈する。遺物の出土は見られなかった。覆土のあり方から判断して古い時期の所産である可能性が高いが、明確な時期は判断できなかった。(市瀬)



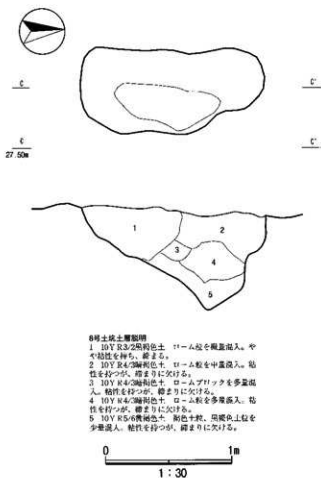
第15図 1号地下式坑・1号溝



第16圖 2号溝



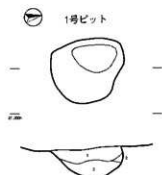
第17図 1~7号土坑



第18図 8号土坑

8号土坑土層説明

- 1 10Y R3/2 暗褐色土 ローム粒を微量混入。やや粘性を帯び、締まる。
- 2 10Y R4/3 暗褐色土 ローム粒を中量混入。粘性を帯び、締まりに欠ける。
- 3 10Y R4/6 褐色土 ロームブロックを少量混入。粘性を帯び、締まりに欠ける。
- 4 10Y R4/2 暗褐色土 ローム粒を多量混入。粘性を帯び、締まりに欠ける。
- 5 10Y R5/6 黄褐色土 褐色土粒、炭灰状土粒を少量混入。粘性を帯び、締まりに欠ける。

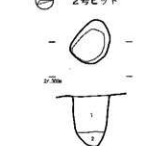


1号ビット

1号ビット土層説明

- 1 10Y R4/4 褐色土 粘土・しまり共にあり。ローム土主体。
- 2 10Y R4/6 褐色土 粘土・しまり共にあり。ローム粒を微量混入する。
- 3 10Y R3/4 暗褐色土 粘土・しまり共にあり。

2号ビット



2号ビット土層説明

- 1 10Y R4/1 褐色土 ローム粒を少量混入する。粘性を帯び、やや締まる。
- 2 10Y R3/2 暗褐色土 ローム粒を微量混入する。粘性を帯び、やや締まる。

3号ビット



3号ビット土層説明

- 1 10Y R3/4 暗褐色土 ローム粒を微量混入する。粘性に欠け、ややしまりに欠ける。粘性を帯び、ややしまりに欠ける。
- 2 10Y R4/4 褐色土 ローム粒を多量に混入する。
- 3 10Y R4/1 褐色土 粘土・しまり共にあり。ローム粒を微量混入する。

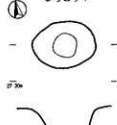
4号ビット



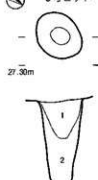
4号ビット土層説明

- 1 10Y R3/4 暗褐色土 ローム粒を微量混入する。やや粘土・しまりを帯び、締りを微量混入する。
- 2 10Y R4/6 褐色土 粘土・しまりを帯び

5号ビット



6号ビット



6号ビット土層説明

- 1 10Y R3/2 暗褐色土 粘土を微量混入する。粘性はやや欠けるが、締まる。
- 2 10Y R3/4 暗褐色土 ローム粒を微量混入する。粘土・しまり共にあり。

7号ビット



7号ビット土層説明

- 1 10Y R3/4 暗褐色土 ローム粒を微量混入する。粘性をやや帯び、締まる。
- 2 10Y R4/6 褐色土 ローム土を多量に混入する。粘性を帯び、締まる。

8号ビット

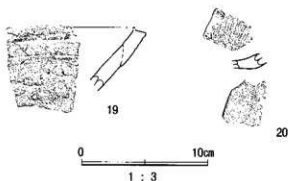


第19図 1~8号ビット

第2節 遺物

遺構からの出土はほとんど無かった。2号溝覆土上層より常滑焼? 1点、他は全て表土層より検出されたもので、在地系土器1点、焙烙2点、陶器2点、磁器5点、鉄製品1点が採集されている。陶器、磁器は現代の物と考えられるので、ここでは検出された遺構(1・2号溝、地下式坑)が含まれる年代を想定できる遺物を図示した。19は2号溝に流れ込んだものと考えられるが、常滑の捏ね鉢の口縁部であろう。内面には摩耗した痕跡が見受けられる。20は在地系の播鉢である。20は所謂在地系土器といわれるもので、金雲母を微量含むことから、近隣で生産されたものと考えられる。これらの生産地ははっきりしない。

(林)



第20図 出土遺物④

第5表 遺物観察表④

図版番号	出土地点	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	調査・技法	胎土	色調	構成	備考
19	2号溝	常滑?	捏ね鉢	口縁部片	(21.6)	-	-	口縁部平明でやや段む。口縁部はコナデ、直下ナデ。	チャート・石英多量、白色粘土少量、砂礫微量	褐灰色	良好	内面に摩耗痕跡あり。
20	表層	在地系土器	播鉢	胴部片	-	-	-	外面割み、張り口数不明。	白色粘土少量、砂礫微量、金雲母微量	にぶい褐色	良好	

第7章 総括

今回の発掘調査は、つくば明野北部工業団地進入路に伴うもので、幅約10m長さ約110mの限定された発掘調査であったため、遺跡の全容や、遺構の全容を把握するには困難に伴う作業であった。また過去の調査事例から見ると、それなりの密度で存在することが想定されたが、検出し得た遺構は、住居跡1軒、溝3条、地下式坑1基、土坑10基、ピット8基にとどまった。以下発掘調査及び試掘調査の成果と当遺跡の特徴を時代順に記載し考察としたい。

縄文時代

今回の調査で時代の判明する遺物は縄文時代中期後葉の加賀利EⅢ～Ⅳ式(3・4)と、後期中葉の堀之内I式(1・2)が出土した。遺構は検出されなかったが、2006年度の炭焼戸東遺跡の調査では堀之内I式の埋窠が出土しているため、当調査区周辺にも当該期の遺構が存在していると思われる。

古墳時代

古墳時代は近隣では、鍋山東原遺跡や館野遺跡、菰冠北遺跡などで調査され、特に館野遺跡からは今回検出された住居跡と同時期である古墳時代後期の住居跡が検出されている。また、調査区南側200m程の地点で2006年度に行われた調査(折原・松田 2006)で、古墳時代前期から中期にかけての住居跡も検出されている。さて、今回の調査において検出された古墳時代と確認できた遺構は、10号土坑と1号住居跡である。各遺構の詳細は本文に譲るが、特に注目されるのは10号土坑であろう。この遺構から出土した10は胴部下位が穿孔されている土師器甕だが、茨城県西部や南部における類例を見ると、大部分は第3章第2節で言及した土浦市石橋南遺跡からの出土例を含め、住居跡及びその関連施設からの出土である。たしかに1号住居が床面まで削平されていること、後述する地下式坑が深さ70cm程度しか残存していないこと等を考えると、遺構上面がかなり削平されていることは確実なので、住居跡が存在していた余地はあるが、この土坑が、断面や底面に柱痕が見えないこと、単独で存在する遺構の可能性が高いこと、110cm以上の深さを持つ可能性があること等より、近隣の類例が確認できないのははっきりとはいえないが、住居跡の可能性より井戸や祭祀的な遺構の可能性のほうが高いように思われる。また、10は土坑の底面より約110cm程の位置からの出土で、何らかの意図をもって投棄もしくは埋納された可能性があることも指摘しておきたい。今後10号土坑については近隣での類例の検出により、その性格を把握できると思われる。

1号住居跡は遺存状態が悪かったが、3点の残存の良好な土師器杯(6・8・9)が床面に近いと思われる位置から出土している。口縁部形状や調整から7世紀前半頃の所産と思われる、この住居跡が廃絶したのもその頃であろう。また、調査区南東に位置する菰冠北遺跡でも同時期の住居跡が検出されており、古墳時代後期ごろに調査地点付近が居住的な空間として利用されていたことがわかる。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構としては3号溝があげられる。近隣では、2006年度における炭焼戸東遺跡の調査において住居跡が9軒、溝が3条、館野遺跡にて住居跡が4軒、溝が1条等、多くの遺構が検出されている。今回検出された3号溝は、その北側にピットが2基(7・8号ピット)、溝内部西側で、径5～6cmの小ピットが一定の間隔で検出されている。小ピットは中央から東側では検出されなかったため断言はできないが、7・8号ピットを含め、櫛などの関連施設が設営されていた区画的な溝の可能性を指摘できる。出土した遺物は7世紀初頭の土師器杯(13)、8世紀後半の土師器甕(11)等が出土している。11の土師器甕は遺存がよく、

この墓の年代が3号溝の埋没年代と考えると良いだろう。また、覆土の状況もその時期と考えられる。また、2006年度の調査において、県内からの出土例が希少な「院」の墨書をもつ11と近接した時代と考えられる須臾器が出土していることや、庇を持つ柱穴列も検出されていることより、この付近にある程度の規模を持つ建物跡が3号溝の埋没したと考える時期に存在していたことは確実で、なおかつ、その建物跡を区画したと思われる溝SD01・03から、3号溝と近接した時期を示す遺物が出土していて、断面形や規模が類似している事より、3号溝はSD01・03と同一の性格を持つ区画溝と考えられる。今後は溝の性格や、当時の土地利用をはっきりさせるため、溝の方向や区画域の範囲確認等が課題となろう。

中世以降

中世以降の遺構と考えられるのは1・2号溝、地下式坑である。2号溝以外では遺物が出土しなかった為、はっきりとした時期は判明しないが、覆土の状況や遺構の性格から考えて中世以降の所産と考えられる。調査区南には中世より海老ヶ島城が営まれており、その城下の一部との関連が興味深いところである。ここで注意されるのは地下式坑と2号溝で、茨城県教育財団が調査した地点から、中世の火葬施設が検出されており、近接していることから、中世には墓域やそれに類する区域として利用されていたことが考えられる。また、2号溝と類似する覆土を持つ溝が茨城県教育財団の調査をした地点からも検出されており、その方向から墓域を区画する溝の可能性も考えられる。また、地下式坑を切って1号溝が作られていることから、墓域の廃絶後に作られたものとも考えられる。

今回の調査地点となる炭焼戸東遺跡は、海老ヶ島城の北で深田を挟んだ対岸に位置する。この地形は、東西南を深田で囲まれた1km×700mほどの楕円状を呈しており、北方は陸続きであるものの、海老ヶ島と非常に良く似た地形を示している。

今回の調査で確認された地下式坑や溝と、茨城県教育財団により南に隣接する地点で発見された16世紀ごろの集落や墓地（同財団2007ab）、さらにその南方で発見された15世紀ごろの井戸や溝（折原・松田2007）から、この楕円状地形の中央部から南部にかけて、海老ヶ島城とほぼ時期を同じくする戦国期15～16世紀の「一般農民層」の集落が、集落の北側には火葬・土葬の混在する墓地の存在が明らかにされた。当地の詳細は、茨城県教育財団調査地点の報告を待ちたいが、若干の考察を試みたい。

元禄15年（1702）の周辺13ヶ村の争論裁許帳々絵図と、安永年間（1772～80）の「海老ヶ島城・松原村絵図」（共に明野町1986）によると、この楕円状地形はほぼ全域が畑で、原と林が一部認められる。つまり、少なくとも18世紀初頭にはこの戦国期の集落は消滅していることが確認できる。また、後者の絵図には、楕円の西端に今館という場所があり、土塁に囲まれた主郭と集落の二つの郭からなる小規模な城が描かれている。現在は宅地化と耕作により殆ど湮滅しているようであるが、地形から南北に200m以上、東西に180mほどの大きさに復元ができ、海老ヶ島城の出城として機能していた可能性が高いと思われる。そうであるならば、炭焼戸東遺跡の戦国期の集落や墓地と、すぐ西に所在する今館との関係が注目されるところであるが、現時点では詳らかにできない。いずれにせよ、度重なる合戦にも関わらず、広大な海老ヶ島城のみならず、その周囲にもかなりの人口があったことは間違いないと思われる。

最後に、調査地点における土地利用の流れを追ってみると、古墳時代後期頃には居住的空間として利用されていたが、中世以降になると区画溝が走り、寺域や墓域等の非居住的空間として利用されていたことが想定できた。その後、詳細な年代は不明だが、江戸期の絵図には既に畑地として描かれており、それが現代まで続いてきたことがわかる。

今後の課題として、古墳時代の調査区における集落の広がり、10号土坑のような類例の蓄積、奈良・

平安時代以降における溝の性格と方向、墓域と考えられる区域が廃絶された時期、海老ヶ島城及びその城下集落と墓域と想定される区域との関連性、等が挙げられるであろう。(林・小野)

引用・参考文献

- 赤井博之 1998 『古代常陸国新治郡跡群の基礎的研究(Ⅰ)～奈良・平安時代の須恵器偏年を中心に～』『奈良考古 第20号』奈良考古学同人会
- 明野町史編さん委員会 1981 『明野町の小字名図』明野町史資料第一集 明野町長加倉井正利
1983 『明野町の遺跡と遺物』明野町史資料七集
1985 『明野町史』明野町
- 茨城県教育財団 2007 『飯沼北遺跡・炭焼戸東遺跡』主要地方道茨西つくば線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査説明会資料
〔茨城県教育財団〕
2007 歴史文化財部ホームページ「発掘情報いばらき」筑西事務所 炭焼戸東遺跡 (<http://www.ibaraki-maibun.org/>)
〔茨城県教育財団〕
- 茨城県教育庁文化課 1985 『重要遺跡調査報告書Ⅱ(城跡類)』茨城県教育委員会
- 茨城城郭研究会編 2006 『図説茨城の城跡』国書刊行会
- 折原洋一・松田政基 2006 『炭焼戸東遺跡 居室は地盤層事業(研究体)松原地区関連遺跡発掘調査報告書1』筑西市歴史文化財調査報告書第2巻 筑西市教育委員会・山武考古学研究所
- 櫻村宣行 1992 『茨城県南部における瓦片式土器について』『研究ノート 第2号』財団法人 茨城県教育財団
1998 『「常陸型瓦」断片小考 - 茨城県南部を中心として -』『列島の考古学 - 渡辺誠先生追悼記念論集 -』渡辺誠先生追悼記念論集刊行会
- 黒澤孝彦他 1997 『南大園遺跡 - 田村沖所地区区画整理事業に伴う歴史文化財発掘調査報告書』上田市教育委員会 土浦市発掘調査会
- 六角武士 2006 『海老ヶ島城跡 - 田舎は地盤層事業(経営体)松原地区関連遺跡発掘調査報告書2 -』筑西市歴史文化財調査報告書第3巻 筑西市教育委員会 株式会社地域文化財コンサルタント
- 斎藤弘 1996 『地下式墳と春日俣礼 - 栃木県下の事例を中心に -』『財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター研究紀要 第4号』財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐々木藤雄他 2007 『茨城県石岡市 片野城跡』石岡市教育委員会・株式会社京航発掘研究所
- 佐々木義則 2001 『茨城県における8・9世紀の須恵器産地概観』『奈良考古 第23号』奈良考古学同人会
- 照山大作 2006 『茨城県教育財団文化財調査報告書第266巻 磯山車原遺跡 つくば明野北部工業団地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
- 中山信名 1967 『新編常陸国誌』宮崎県思文堂刊本
- 中村哲也 2003 『“常陸型瓦”以前 - 飯川流域における古墳時代要形十部の様式的検討 -』『領域の研究 - 阿久津久先生追悼記念論集 -』阿久津久先生追悼記念学業実行委員会
- 明治大学木村研究室 1986 『明野町の村絵図』明野町史資料集第十二集 明野町長加倉井正利
- 茂木悦男 2002 『茨城県教育財団文化財調査報告書第189巻 鏡野遺跡 主要地方道下館つくば線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
- 栗瀬裕一 2006 『地下式墳の分想と偏年試論 - 中馬場遺跡他の千葉県の事例をもとに -』『歴史中近世考古 第2号』房総中近世考古学会

写 真 图 版



遺跡遺景 (北西より)



遺跡全景

図版 2



試掘 1号住居跡検出状況 (南より)



試掘 3号溝遺物出土状況 (南東より)



遺跡全景 (南より)



遺跡南側 (北東より)



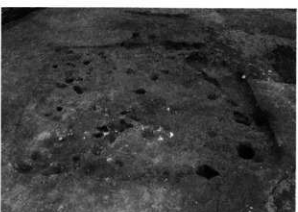
遺跡北側 (南東より)



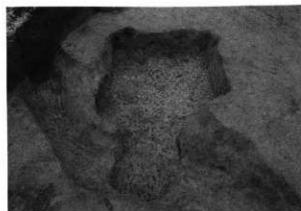
遺跡全景 (北より)



基本土層 (西より)



1号住居跡完掘 (南より)



1号地下式坑完掘 (東より)



1号地下式坑完掘 (南西より)



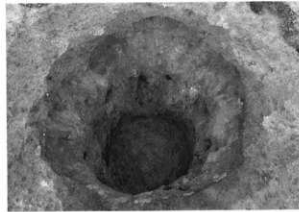
1号溝完掘 (北東より)



2号溝完掘 (東より)



3号溝完掘 (西より)



9号土坑完掘 (東より)

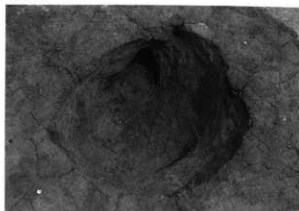


10号土坑遺物出土状況 (南より)

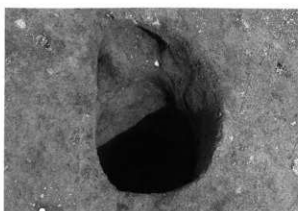


10号土坑完掘 (東より)

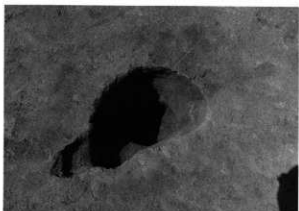
図版 4



1号ピット完掘 (東より)



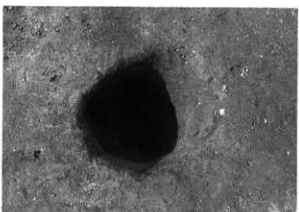
2号ピット完掘 (東より)



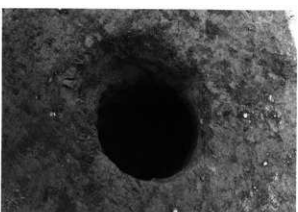
3号ピット完掘 (南より)



4号ピット完掘 (南より)



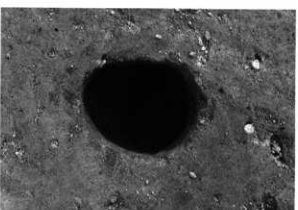
5号ピット完掘 (東より)



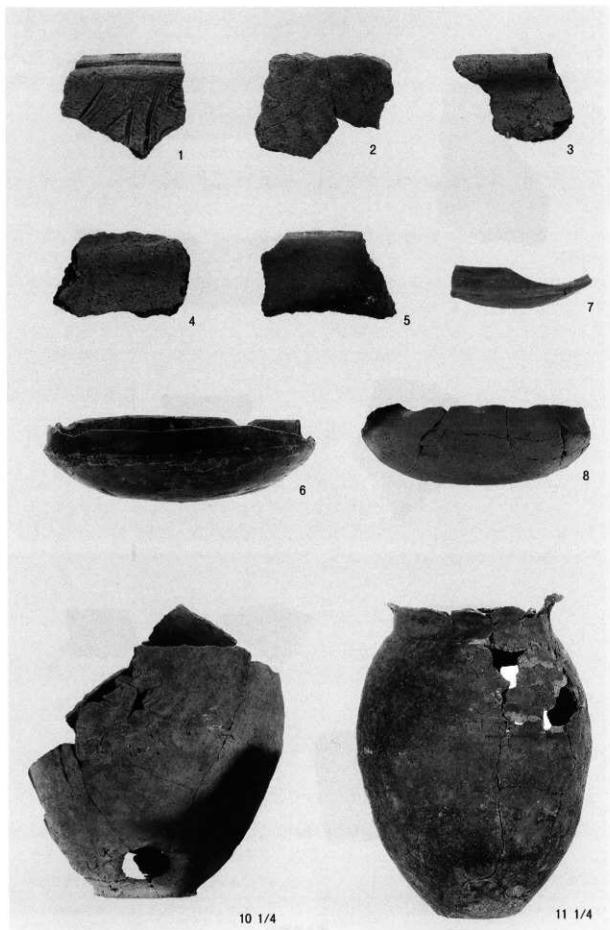
6号ピット完掘 (南東より)



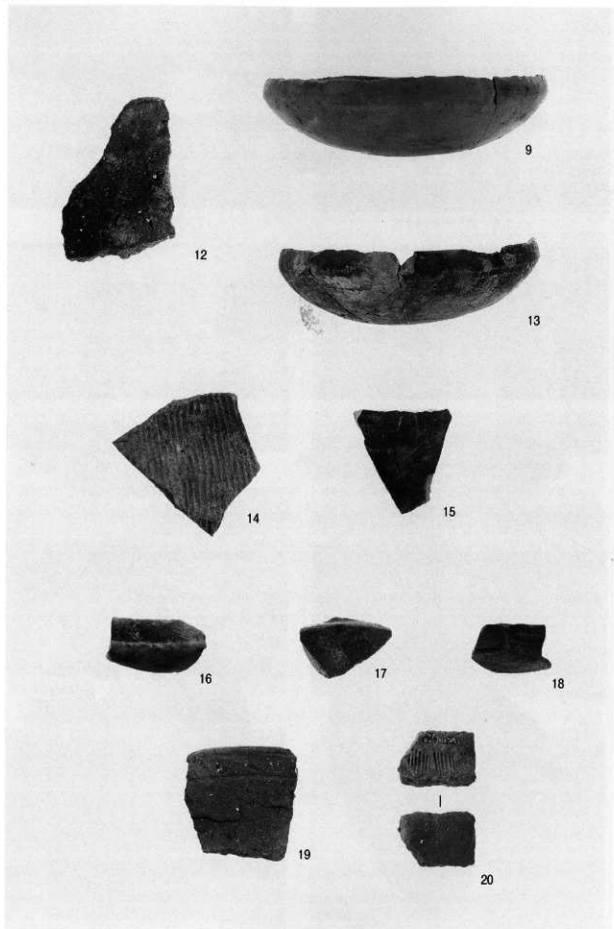
7号ピット完掘 (北東より)



8号ピット完掘 (北より)



出土遺物①



報告書抄録

ふりがな	すみやきどひがしいせき							
書名	炭焼戸東遺跡							
副書名	つくば明野北部工業団地進入路埋蔵文化財発掘調査報告書1							
シリーズ名	筑西市埋蔵文化財調査報告書第4集							
編集者名	西脇俊郎・大橋 生・林 邦雄							
著者名	大橋 生・林 邦雄・小野麻人・市瀬俊一							
編集機関	筑西市教育委員会							
所在地	〒308-0031 茨城県筑西市丙360番地 ☎0296-22-0183							
発行年月日	2007(平成19)年10月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°	°			
すみやきどひがしいせき 炭焼戸東遺跡	ちくせいしつばらあきすみやきど 筑西市松原字炭焼戸 629他	502061	-	36° 15' 47"	140° 02' 12"	2007.5.28 ～ 2007.6.9	967㎡	道路敷設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
炭焼戸東遺跡	集落跡	縄文	なし		縄文土器	本調査では、調査地に古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて遺構・遺物が希薄ではあるものの、集落が営まれていたことを確認した。また、中世の海老ヶ島城と同時期の地下式坑を検出し、調査地が中世に墓域として利用されていた可能性が高いことを確認した。		
		古墳	住居跡1・溝1・土坑1		土師器			
		奈良・平安	土坑1		土師器・須恵器			
		中世以降	地下式坑1・溝2・土坑8		常滑? 土師質土器			

茨城県筑西市

筑西市埋蔵文化財調査報告書第4集

炭焼戸東遺跡

-つくば明野北部工業団地進入路埋蔵文化財発掘調査報告書1-

印刷 平成19年10月25日

発行 平成19年10月31日

編集・発行 筑西市教育委員会
株式会社東京航業研究所

印刷 関東図書株式会社

〒336-0021 埼玉県さいたま市南区別所3-1-10
Tel. 048-862-2901